



近代中国における師範教育の創立

著者	崔 淑芬
雑誌名	筑紫女学園大学研究紀要
号	14
ページ	67-79
発行年	2019-01-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1219/00000981/

近代中国における師範教育の創立

崔 淑 芬

Foundation of First Teacher's school in Modern China

Shufen CHI

筑紫女学園大学研究紀要 第14号別刷

2019年1月

福岡県太宰府市石坂

Reprinted from *Journal of Chikushi Jogakuen University*

No. 14, pp. 67–79, January 2019

Ishizaka, Dazaifu-shi,

Fukuoka-ken, Japan

近代中国における師範教育の創立

崔 淑 芬

Foundation of First Teacher's school in Modern China

Shufen CHI

はじめに

近年、中国における教育改革は大きな課題となっている。その中で、教員を養成する師範教育の改革は最も注目されている。現在の中国師範教育制度をいかに把握し、これからの師範教育の在り方をどのように考えるべきかという問題は、過去への省察を抜きにしては考えることができない。

1895年、日清戦争の敗北を契機として中国は、ほぼ同時期に近代化のスタートを切った隣国日本の、近代国家としての発展が近代的学校制度導入による国民教育に基礎を置くものである、という認識に立ち、日本の学校制度をモデルにその模倣的移植が図られたのである。1897年上海に創立された南洋公学師範院が、最初の近代的師範教育機関であった。その後、私立通州師範学校、更に、近代学校制度の導入に伴い、京師大学堂に速成科としての師範館が付設されることになり、また、1904年に制定された「奏定学堂章程」によって師範学堂が正式に設立されることになった。

このような経緯から、中国における教育の近代化は外的要因に触発された結果出発したのであり、それに負うところが大きいという論調が大勢を占めてきた。しかし実は、その見方は、中国における伝統的な教育制度・体系がその基礎、あるいは底流となっていたことを看過していた皮相的な認識に基づくものではなかろうか。

本論は清末以前の教員養成特性を踏まえながら、中国の近代化を目指す師範教育の創始期において、最初の近代的師範教育機関、公立の「上海南洋公学師範院」及び私立「江蘇省通州師範学校」を取り上げ、それらの学校実態の考察を通じて、中国最初の師範教育の特徴、教育趣旨、またその影響はどのようなものであったかを究明したいと思う。

一、新教育の萌芽

1、清末以前の教員養成

中国には以前から、高級官吏や社会の支配者層の育成のため、高等・中等の教育機関があった。近くは明・清両代において、国子監を頂点とする府学・州学・県学・官立書院などの官立学校およびその下にある義学・社学・書院・正音書院・義塾（族塾）・家塾などの公私立学校、さらに清王

朝の満洲民族の宗学・覚羅学・旗学などの官立学校が、一つの体系を構成していた。

国子監は、往々にして、科挙に及第し、挙人や進士として官界や教育界に進出していくことのできない第二流、第三流の人物が、そこに在籍することによって官界や教育界に出て行くという便宜的な機関に墮していることが多かった。地方儒学もまた、ときには科挙応試のための所要資格を、そこで獲得するだけの場所、あるいは生員の資格を所有することによって、いくばくかの特権的生活を地方郷村において保持したが、教育の場としては有名無実化していることが少なくなかった。それにもかかわらず、両者はいずれも明・清の両代を通じ、形の上では、依然として変わりなく中央と地方における高等・中等の機関であった。

また、民間庶民の幼童を対象とする初等教育の機関もあった。

明・清両時代における社学や義学の教育がそれである。地方の官吏と在郷の縉紳などの指導者とが協力し、庶民の幼童に日常所要の道徳的・生活的基礎知識を与えたという点において、とにかく初等教育の体裁を成していたと行うことができるであろう。しかも叙上の諸学校には、能力さえ備えてさえおれば家格、身分、貧富などの差別によらず、誰でもが進学してよいという可能性が開かれていたし、ときには学校種別の段階をおって逐次高等の学校に進学することができるという、縦の学校教育体系を具備するところさえもあった。明代の国子監は府・州・県学からの歳貢生員の入監が、洪武初制以来の基本であった。生員になるためには、県試・府試・院試などの童試を経過するわけであるか、身分清白でさえあれば応試の資格あった。ただ、明代の正統元年からは社学教育の振興のため、社学の児童の中から優秀者を選び儒学正員に補充することにしていた。ここにおいて、社学→国学監という縦の学校教育体系が形式的ながら形成、実現したのである。

しかしながら、それら各級の諸学校における教員の確保と養成について、当時の統治者にはどのような計画と努力が存在していたのであろうか。

明の『大明実録』には教員に関する記述があるので、以下に参照してみる。

「国学というのは、天下の賢才を集め、四方崇慕、模倣するところであるので、必ず、師道が厳しく、後代に正しく模範をなすことである。師道が立たなければ則ち教化が行われぬ。すると、天下はなんの取るべきところとならうか。郷は教義を尊崇しなければならない。品行方正で、人の師表となる生徒を模範とするが、これらの生徒にもし、ただ文辞・暗記のみ教えるのでは、真に教えたということにはならない。」(注1)

つまり、師として必ず師道が厳しく正しいことが必要であり、また教えるというのは、ただ文辞・暗記のみ教えていたのでは真に教えたということにはならない、教師は人の師表であるべきことを強調しているのである。また国子監の教師の待遇面で見ると、祭酒から学録まで、与えた品級がかなり高い。例えば、祭酒が正四品、司業正五品、中央官吏の品位に相当する博士が正七品で地方の県丞に相当している。俸禄も、品級に見合っかなり高い。洪武元年と比べると、各品級と俸禄は少し下がっているが、大きな差ではない。

一方、当時の教師の選定はどのようになっていたのであろうか。永楽22年12月、明成祖が礼部に對し、次のように諭示している。「教師儒生の職稱はみだりに与えではならない。人材をつくることに関わっているからである。教える教官は必ず有能な儒生から選ぶ。……師道が立てば、則ち善

人が多くなる。国子祭酒、師業などは他の官職など及びもつかないものである。即ち、博士・学正も、また必ず学識淵博で威望のある者を充てる。」(注2)

つまり国子監の教師は徳高望重な儒子から厳選すること、あるいは、会試落第の挙人が地方儒学の教員として任用されたり、また国子監の監生が儒学の教員に充当されたりする上からの指導という事実があったことが分かる。そこからみれば、明代統治者が教育を重視していたことは明白である。さらに、初等教育機関に当たる府州県学の教員の採用はどのようになっていたのであろうか。

明初、府州県学の教員の殆どは、地方によって儒士が推薦されていた。洪武10年、朱元璋は地方に教員を求め、浙江省温州府に所属する県から民間の秀才を選び、教授、教諭、学正、訓導などの教職を与えるように命じた。

また、洪武26年、国子監祭酒・胡季安に国子監生で年齢30歳以上の優秀な人材341人を選び、教員とするように命じた(『南雍志』巻1「事紀一」)。洪熙元年8月、経学に精通する王煥ら288人を選び、翰林院の試験を受けさせ教員に準じることにした。また民国景県志巻五が「清制、直隸省(今の河北省)の府州県の大郷にそれぞれ社学を設置。生員をもって社学の教師となし、彼らの差役を免除する」。しかし「過失のあった人は師となることはできない。」(「其経断有過之人、不許為師」『續文献通考』巻50)と記すように、清代の社学には、地方儒学の生員をもって社学の教員とし、その差役を免除するという特典を与えたという記述もある。これはまた、明・清両代を通じて多く見られたあり方ではあったが、しかしそれは、明確に制度化され規制化されたものではなかった。教員の確保がめざされ、そのための資質の設定と、その計画的な養成とが国の教育政策として初めて施行されるに至るのは、清朝の末期、近代教育制度の萌芽期に至ってからのことである。

2、新教育の萌芽と師範教育の提唱

同治元(1862)年以来、中国は外国の物質的優秀さに対抗するために、まず大砲・軍艦をはじめ西洋式の武器について学び、次に自らの手で製造すべく、その手始めに、学習手段としての外国語を学び、翻訳のできる者を養成しようとした。同治元(1862)年には、北京に同文館を設立、同治2(1863)年、李鴻章の奏請により上海に広方言館、続いて翌年には広州に広東同文館を設立した。これらでは西洋言語の学習を通して、西洋の書物を読み、翻訳をするまでに至った。また光緒10(1884)年、湖北に設けられた自強学堂も主に西洋言語学習の発展を目的としたものである。これから30年の間、西洋言語の学習は当分、中国新教育の中心的課題となった。(注3)

この新教育の萌芽期における欠陥について、当時の清末～民国初期の啓蒙思想家、ジャーナリスト、政治家梁啓超(1873年～1929年)は次のように指摘した。

「それ(教育)を振興しようともせず、根本的改革を図ろうともせず、ただうまくやっつてのけようだけ試みても、成果の殆んど上がらないのは当然であった。疾病の理由には次の三項がある。その一は科挙の制度がまだ改められず、就学するものの才能の貧しさである。その二は師範学堂が建てられて居らず、教師にその人を得なかったことである。その三は専門に分化されていなかったために、学の深奥に到り得なかったことである。」(注4)

ここでは、梁啓超は、その原因の一つとして、「師範学堂がまだ建てられていないので、優秀な

教師がない」からだということを強調していた。

また、当時の官僚も、教員の養成が中国にとって緊急必要事であったことを認識していた。清政府学務大臣・張百熙（1847年～1907年）は「師範教育を振興することは焦眉の急である。各学堂は必ず教師あり、その教員を養成するためには『宜首先急辦師範学堂』と主張していた。それを初めて実現させたのが、南洋公学師範院と私立通州師範学校である。

二、師範学校の創設と教員の養成

1、南洋公学師範院

中国の師範教育は、光緒23（1897）年に設置された南洋公学の師範院に始まった。慮紹稷が『中国現代教育』の中で、「光緒23（1902）年、盛宣懐が創立した上海南洋公学師範院は、中国の正式な師範教育の始まりである。」（注5）と述べていた。

『交通大学校史』によると、南洋公学は上海交通大学の前身である。光緒22（1896）年4月8日、招商局と電報局の督弁・盛宣懐が上海の徐家匯で南洋公学を創った。その経費は全て両局の紳商が捐献しているので「公学」と命名された。全校を以下の四院に分けている。

- ①師範院：中国では初めての高等師範学校である。優秀な学生30人を選択して師資として養成する。
- ②外院：師範院の附属小学校
- ③中院：中学校に相当する学校
- ④上院：大学に相当する学校

なぜ盛宣懐が師範院を設けたのかについて、先ず盛宣懐の経歴を見てみよう。

盛宣懐（せいせんかい、1844年11月4日～1916年4月27日）は、清末の政治家・実業家、洋務運動の代表人物。江蘇省常州出身。字は杏蓀または幼勗、号は愚齋、江蘇省武進県人。李鴻章の最も有能な幕客の一人として、清末に企てられた新式企業、例えば電報、汽船、鉞山採掘、鉄道建設、織布工業などの管理経営者となった。宣統3（1911）年、清国最初の責任内閣の郵電部大臣となった。（注6）

このような大企業家、大官僚が南洋公学・師範院を創立した直接の原因は、彼が光緒34（1908）年の8月から11月初旬まで3カ月、日本を訪問したことであった。その時の盛宣懐は清政府の郵伝部右侍郎、会辦商約大臣であり、また漢冶萍石炭鉄公司の主宰者であった。彼が書いた『東遊日記』によると、訪日の目的は次の3点であった。(1)病気の治療（重い喘息であった）(2)日本側と中日合弁の漢冶萍公司についてさらに交渉する(3)日本の工場・鉞山を見学し、進んだ技術経験を学ぶ。

日本に滞在中、彼は長崎、神戸、横浜、東京、大阪、下関、尼崎、京都、若松を歴訪するとともに、伊藤博文、大隈重信、桂太郎、高橋是清、松方正義、小村寿太郎、松尾臣善ら日本の政・財・商工界の主要人物と会見した。そして日記中に、日本の幣制改革の進展状況や銀行体制、硬貨鑄造の現状を観察し、その記録を残している。また川崎造船所、日本製鉄廠、三池炭鉞、大阪造幣局、尼崎の醸造醤油株式会社、京都の磁器工場や織物株式会社の訪問記録、島津製作所等の生産、設備、発展の状況などをみな詳しく記録している。『東遊日記』の中で彼は、常に中日両企業の関連事項

を比較しており、ここからいろいろなヒントが生まれ、実用知識がよく学べるとし、また感慨をよく記している。例えば、日本製鉄所はもともと十数名のドイツ技師を招聘していたが、その後日本は自国の技師を養成すると外国人技師を解雇し、給料の節約ばかりか仕事もより熱心になるという話を聞いて盛宣懷は「中国での専門学校の設立は実に緊急事である」ことを実感したという。『東遊日記』によれば、彼が、超大型企業の川崎造船所を見学した時、工場建設が極めて簡素なことに大変意外と映り、見学を案内していた同所の松方所長にこの点を質問した。松方の答は「実業に従事する者は一般に実際面を重んじ、外観の飾りを気にしない。早稲田大学でも、有名校でありながら、校舎は凝っていない。これは敵国のみならず、余は英独の工場へ行つたが皆しかりである」というものであった。盛宣懷は、「中国が工場を建てる場合、先ず建物に念を入れる。もしこの工場に外国人を招聘する時は、『更に念には念を入れ』、最後に『家は建てたが資本は半分消えてしまい』、工場は中途半端で立ち切れになる」と言う。

日本での参観訪問を通じて盛宣懷は、中国での出発点は先ず教育の振興であることを痛感したのである。特に師範教育を強調した。

「私は次のように思っている。師道を立てれば則ち善人が多くなる。故に西洋の国は必ず師範から源を發する。蒙養が正しければ則ち正統教育が始まる。故に西欧諸国の教育は必ず小学が土台になっている。これは中外古今の教育宗旨が異なることを示している。」(注7)ここでは、欧米が師範教育を重視していることをあげるとともに、さらに小学校教育が古今中外を通じ、すべての教育の基底となる大切なものであることが述べられている。

また、「しかし私は前年、天津二等学堂を創設し、教習を求め生徒を募集した。(教習の)ほとんどは西文に精通する者で、經史大義の基礎を浅くかじっている程度である。中学(中国の伝統的な学問)を研究している者はおおよそが文章・言葉に夢中になって喋り続ける。才能ある教師が乏しく良い生徒を選りすぐることも難しい。このような状況では私は、倍も労力をかけても、半分しか成果は上がらないと思う。その淵源に導かなければ綺麗な水は流れることはできない。基礎が正しくなければ、その構造を堅固にすることはできない。初め、南洋公学を設けることを考えたが、それを模倣して天津に二等に分けた学堂をつくらうと思っている。……ましてや師範学堂は、学堂の中でも大切なもので、急いでつくらねばならない。既に病深く、治癒する事が求められている。師範学堂の設立は焦眉の急である。今、大急ぎで追い掛けても、おそらく間に合わないだろうと心配している。」とあり、この中で彼は、「況師範小学猶為学堂一事先務中之先務」と、師範教育、特に初等師範教育の重要性を強調している。(注8)彼は、よい教員を得ることと、すべての教育の基底となる小学校教育を確かなものとして出発させるために、先ず師範学院と外院とを設立することの必要性を認識していたのである。しかし、ここでもまだ、南洋公学内における師範院設立の趣旨は、必ずしも明確な形で説述されているとは言いがたい。しかし、同じく盛宣懷の摺分の中には次の一節がある。

「直ちに昨年二月間、才能ある者14名を選び、先ず師範院という学堂を設け、外国の教習を招聘することを計画、中国と西洋の学問を教えることとした。その学問が正しく、実用的で、しかも生徒が勉学に勤しみ、教習がよく教え導くことを目標となす。後、日本師範学校が附属小学校を持つ

ていることを模倣して、特別に10才以下から17～18才以上の聡明な幼童120名を選んで学ばせる外院を一つ設立、そこでは師範生をクラス分けして教えさせる。そのようにして一年もすれば、師範生は勉強しながら教えることができ、実用・学問両方とも達成することができる。」(注9)

この一文が、先にも述べてたように南洋公学の創設自体を“教員養成教育推進のため”との速断に陥らせる原因となっているのである。すなわち、師範院の学生は、中国と西洋の各学問を勉強の上、勤学与善誨一教示の方法に熟達することを以て指畷とした。外院は日本の師範学校の附属小学校に倣って設立したものであり、師範院の学生が班に分かれてこれを教える、すなわちここで教育の実習をする学校であった。そのために師範院諸生は且つ学び且つ教え、知行ならびに進むの益を得たというのである。確かにこの一文の説述の限りでは、外院の設立は師範院の教育目的を達成する手段としての一機関として設立されたもの、と言わざるを得ない。そしてまた、師範院と外院とから出発した南洋公学は、近代的教員養成の学校として出発した、と考えられやすいわけである。

この盛宣懐の外院(即ち小学)と師範院の構想は梁啓超の師範教育振興の主張に近いと言える。梁啓超は「論師範」の中で、「日本の興学は善行である。…師範学校が小学校と並び立つ。小学校の教習は即ち師範学校の生徒である。数年後、小学校の生徒が中学、大学の生徒に上がって、小学の教習、即ち中学・大学の教習に上がることができる。故に師範学校の設立は、様々な学校の大切な基礎である。」と述べている。(注10) また、「日本師範院は附属小学校を持っていることがよい」との認識は梁啓超の視点とほぼ同じである。梁啓超が「師範を論ず」を発表した翌年の1897年2月には、盛宣懐は既に上海に設立した南洋公学の中に師範院を設けていた。これはやはり、教員の自国内自給をアピールする梁啓超の教育論が盛宣懐に刺激と啓発を与えたと思われる。(注11)

南洋公学師範院は光緒22(1897)年4月7日、上海・徐家匯の民間アパートにおいて正式に開学された。「第一期募集した師範生は40名、皆20歳から35歳までの青年であり、ほとんど挙人、廩生ばかり。最初師範院は授業がなかったし、教員の授業時間もはっきりしていなかった」が、「1898年から学科によってクラスを分けた」(注12) その構成が師範院と外(小学)、中(中学)、上(高等学校)院の4院である。上・中・外の3院の構成人数は「外院生4クラス一百二十名、中院生4クラス一百二十名、上院生4クラス一百二十名」(「南洋公学章程」第二章第三節)であった。また「外・中・上三院学生をそれぞれ4クラスに分け、各クラス三十人」と三十人一班である。さらに「外院生至第一班、通昇中院第四班、中院生至第一班、通昇上院第四班。上・中・外院学生、皆歳昇一班」と、1年1班進級が原則として規定されていたのに対し、師範院は「師範生分格五層」と五層分格の制度であった。「師範生合第五層格、准充教習」は前述した通りである。第五層格学生は最上級学生に該当しているが、層と学年とは必ずしも同一ではなかった。外院・中院・上院の3院は、小・中・高一貫教育という教育体系採択の建前に立っていた。したがってここに集まる学生は、外院入学の際にだけ試験を受け、そのうえで2か月間の仮入学の処置が取られるだけであった。その間の事情については、南洋公学章程第六章第一節の「師範院生の試験に合格した後、受験生には仮入学の資格である白据を与える。師範院で2カ月の仮入学をさせ、その成績によって第一層の者には藍据、第二層の者には緑据、第三層には黄据、第四層には紫据、第五層には紅据を与える。」によって知ることができる。また、班次別による学年進級制度をとらず、層格制に基づく順次昇格

の方法をとっただけでなく、層格制の内容自体が、いかにも古い儒教倫理的教師観に基づく教師像の育成に重点を置いたものであり、学術・知識の育成向上よりも教員としての品性と教育技術の訓練に重点を置く傾向の強いものであった。南洋公学章程第三章・四院学生班次等級の第一節が、そのことを示している。つまり「師範生はそれぞれ五層に分られ、格（座右の銘）を持っている。第一層の格は、学問に対する意欲を持ち、よき人材となることができ、しっかり教えることができる資質を持ち、興味が素晴らしく礼儀は正しく、遠大な志を持ち、性格は温和なこと。第二層の格は、よく学びよく教え、学習に対しての根気力がある。規則に従い、よく相談する。公を先とし、私を後にする。第三層の格は、よく教え導く。よく観察し、秩序正しく、支配し、臨機応変である。第四層の格は、限界を気にかけず争うことがない。また妬まず、驕ることがない。けちけちせず、行動が俗に流れることなく、怒らない。第五層の格は、性格温厚で、学問によく精通し、知識が広く度量が大きい。謙虚で、落ち着いていることである。」（注13）しかもこの第一層から第五層までは、人によって進捗の度合いが違って、「師範院の生徒を教習に充てるのは、速くても1年以後とするのを基準とする」（「師範院諸生挑充教習、至速以一年後為準。」）というのである。これによっても、学年進級制によることもなく、特別な進格制によっていたことがまた明白である。

叙上のように、師範院は南洋公学諸院のうち、最も早く創設されたというだけではなく、特別な構成になっていたし、特別な教育内容と方法とが採択されていた。外院が日本の附属小学校に倣い、教育実習の場として師範院とほとんど同時に設立されただけではなく、さらに相次いで設立された中院と上院においてさえも、その意味するところは必ずしも明確ではないが、ともあれそこにおける教育は「上・中院の教習、皆師範院の出身」として師範院生を充当することに定めていた。このようなところから、南洋公学の中心は師範院にあったし、その設立趣旨も、師範院においては近代教育にふさわしい新しい教員を養成することに主眼を置いていたのではないかと見られやすいのである。

中国の有名な教育家であり、中華民国初代の教育総長である蔡元培（1868. 1. 11～1940. 3. 5）は、1901年から南洋公学で教鞭を執ったことがある。彼はその後、南洋公学の特別クラスの主任教官にもなっている。この特別クラスは、開設準備中であつた経済学科への進学希望者を対象として、英語・数学・政治学・財政学などの予備教育を施す目的で編成され、30数名の生徒が学んでいた。彼らは半日を読書に、半日を英語、数学の勉強に充てることと定められていた。蔡元培は各科目の必読書を指定し、生徒に常時1～2科目を振り分けた。生徒は、蔡元培が指定した書物を書名リストの順にしたがって図書館から借り出すなどして読まなければならなかった。蔡元培は読んだ本の内容についてのメモを生徒に毎日提出させ、自ら講評を付けて後日生徒に返すようにした。

また彼は、日本語の学習を生徒に奨励し、自らも日本語を教えた。蔡元培は日本語を独習していたので、話すことはできなかったが読むことはできた。世界的な名著は多くが日本語に訳されていて、値段も安いので日本語版から中国語に訳するのが世界の新思潮を取り入れるうえで最も手取り早い方法であると彼は考え、日本語から中国語への翻訳の要領を生徒に教えたのである。蔡元培の学生であつた教育家・政治家、黄炎培（1879～1965. 12. 21）は、「蔡先生の後進を指導する主旨は、千言万語、帰するところ“愛国”の一語につきる」と回想している。また、彼の教育方法には6つ

の特徴があったという。その一は、書物学習と身体鍛練との調和である。その二は、教科書と参考書いずれも重視し、三は読書、作文のいずれも重視したこと、四は講義と座談の併用、五は個別指導を重視、学生の個性伸長に意をもち、六は学生と共にしばしば討論したことである。「先生の教育者としての日常は、“学んで厭かず、教えて倦まず”の精神で一貫していたと思う」と黄炎培は回想する。(注14) 当時、蔡元培の学生であったのは黄炎培の他、邵力子、王世微、胡仁源、謝元量、李叔同等40余人であった。一時、南洋公学は愛国の革命知識人が集まる場所ともなったのである。

この南洋公学にたくさんの優秀な人材が集まる原因の一つは、その設学宗旨にある。

「公学は、中国の経史大義によく精通し、その根底を基礎に置くことを目標とする。西洋のような政治家、日本のような官僚の養成を目指し、フランスの国政学堂も少し模倣する。そして、工芸・機器・製造・礦冶等の諸学科、それぞれの学生の資質に合う科目を学ばせる。大体その学科に精通すればすぐに選出して専門学堂に入学させる。もし一貫して公学で学んで卒業しようとする学生は専ら政治家たるの学を学ぶ。」(注15) つまり、南洋公学設学のめざすところは、その中心が日本の師範学校のように、教員の養成に置かれていたわけではなかった。公学に学んで、始めから終わりまでの一貫教育の中で修学し卒業してゆく学生は、「もっぱら政治家たるの学を学ぶ」ことを目的とし、学校自体はフランスの「国政学堂」に倣うことを本来の趣旨としていた。この点については、『交通大学校史』の中に次のように述べられている。「... 外院は国語、算学、地理、史学、体育など五科目を学ぶ... 南洋公学は尤も、開辦の目的は政治人材を養成するため、中国経史大義を通達することを教育の基準とする。学生はほとんど工芸、機器、礦冶、商務、鉄路、船政などを学ぶ。優秀な卒業生は外国に留学させる。」

ここでは、盛宣懷は実用主義的な洋務運動派の観点から、梁啓超・張之洞らの「政は芸より急なり」の考えを持ちながら、伝統的「中学」(中国の学問)精神をあくまでも固守することを主張し続けた。

また「籌集商捐開辦南洋公学摺」の摺文の中には、次のような一文もある。

「私が今、南洋公学を設立するのは、国政の義を取って、それを達成・実現するためである。今回、専科を欽定したのは、実に内政、外交、理財に従って定めたのである。その後、毎年年末の大試験後、学生の名簿及び試験成績の詳細な等級リストを作成して、当該学生の出身省の学政に送付、郷試の年をまってレベルごとに推薦、採用することになる。」

この一文からもまた、南洋公学の設立において、盛宣懷のめざしたところが察せられよう。すなわち「中体西用」の立場に立って新しい人材を教育することを目的とはしながらも、それは当時、問題となりながらも改正を行った上でなお存在していた科学と結びつき、改正した新しい科学の綱目を通過させた上で、それに基づく新教育による修学者を官界に送り出し、国政に参与させるところに南洋公学設立の大きな目標が置かれていたのである。

光緒31(1905)年の始めに至ると、南洋公学は上海高等実業学堂に改められていたが、さらに民国元年に至ると交通大学に改められている。そこでは最早、それらの学堂の性格上、師範院としての存在ではなかったであろうし、設立当初とは、教育の目的も内容も大きく変わっていた。その後、

近代学校制度の導入に伴い、京師大堂に促成科としての師範館が付設されることになり、光緒30（1904）年に制定された「奏定学堂章程」によって師範学堂が正式に設立されることになるのである。

しかし、計画的組織的養成機関がまず南洋公学師範院に始まったという点は高く評価することができる。また、南洋公学内の外院をはじめとして、中院と上院の両院までが師範院の教育目的を達成するために参加し、動員されるという点も、それまでにない在り方として高い評価を与えることができる。しかし南洋公学の諸院は、けっして師範教育という目的達成のための手段・方法として設立されたものではなかった。むしろ、外・中・上各院の一貫教育による中体西用的新時代人の育成という盛宣懐の考えに沿って、師範院が手段として参加してゆくというところに、この学校の本来の在り方があったようである。

南洋公学について論ずる人々には、中国最初の教員養成機関としての師範院の設立に焦点を置くものが多い。しかし私は、この学校が教員養成を中核として経営された学校ではあるが、別な性格を持っていたと見たい。これまでの考察から見れば、南洋公学は「中体西用」的な在り方を志す新政下にあつて、官僚あるいは為政者として新しく活動できる人材の養成を本来の狙いとしていたのである。そのために、最も基礎になる小学校教育からしっかりした人材を培おうとしたのであつて、その趣旨にかなう、有為有能な教員養成を組織的計画的に育成していこうとするところに本来の目的があつた。考えてみれば至極当然なことであるが、そうした組織的な機関が当時の中国には存在していなかったことから、それを自前で行っていこうとするところに、南洋公学における師範院の本来の存在意義があつた。

教員の国内自給をアピールする梁啓超の教育論「論師範」が、南洋公学の設立奏請者であつた盛宣懐を刺激し啓発したと言われるが、盛宣懐は一方では政治家であり、また実業家である。その立場から彼は、彼と同類の人材を南洋公学で養成し、あわせてその種の人材養成を大きく推進する教員の養成を試みようとしたのである。つまり、盛宣懐にあつては、時代が要請する政治家・実業家の育成に主眼が置かれており、教員養成はそのための手段として考えられたのであつた。

一方では、国立京師大学堂師範館の開創と同時に、民間設立の師範学校もあつた。長江筋財界の有力者であつた張謇による南通の私立通州師範学校（今の江蘇省南通師範学校）がそれである。この学校について主なところを次に解明して行きたい。

2、張謇と私立師範教育の展開

張謇（ちょうけん、1853. 7. 1～1926. 8. 24）は清末民初の政治家・実業家・教育家。字は季直、号は啬庵。江蘇省南通の人。張謇による南通の通州師範学校は、いわば民間設立の私立師範学校であつた。それは張謇自身の文になる通州師範学校議の中に「中国の師範学校は光緒28年から始まつたが、民間の私立師範学校は通州から始まつた。21省からなり、広い国土、4万々人口の国の中では、同胞に知識を教えるためには、僅かこれだけでよいのだろうか。」とあることによつても、明確に知ることができる。『中国近代教育文選』の中にも「通州師範学校は中国近代最初の私立師範学校である」と述べられている。（注16）

張謇は中国実業界のバイオニアとして有名な知識人である。清末から民国初期にかけて実業・教育・政治など多方面に活躍した。光緒20年（1894）、進士となり、張之洞、劉坤一ら総督の知遇を得る。翰林院修撰として、日清戦争に対する李鴻章の妥協策を弾劾した。日清戦争後、官途を断念し、実業界に乗り出し、南通に大生紡績を設立した他、諸種の事業を起こし、また、図書館、博物館を設立した。のち、師範学校等各種の学校をつくり、1902年通州師範を設立して師範教育に先鞭をつけ、1920年南通大学を設けた。清末立憲運動に参加し、江蘇諮議局議長となった。辛亥革命では臨時政府に参加したが、のち共和党を組織して袁世凱の下で農商務総長となり、文化教育事業にも活躍し、中央教育会会長になったことがある。1915年帝政に反対して下野、以後家業と地方政治に専念した。

つまり張謇は、中国近代早期の民族資本の企業家であり、教育家でもあり、中国で最初の私立師範学校一通州師範学校の創立者である。この通州師範学校創設の発想のきっかけとなったのは日本訪問であった。

光緒29（1903）年、大阪博覧会に招待されて日本を訪問、その見聞を集めて『東遊日記』として出版した。彼は日本政府の民営商工業をもり立てる政策を非常に称賛し、これは日本の「官智」の程度の高さを計る物差しであるという。これと比較して、中国の官務（官営）企業である上海製造局は規模が大きく経費も十分あるが、「農工実業のために船一艘、機械一台」造るわけではなく、実に残念であり、痛心なことであるという。張謇は日本の発展経験を総括して、重要性から並べると「教育第一、工第二、兵第三」であるとし、滅亡を救い、生存を図るには教育を興す以外道はないという。しかし教育を興すにはまず実業を盛んにしなければならず、そうでなければ教育に使う金を出す所がないという。彼は日本の職業教育にことさら傾倒し、日本の関係者からその経験を充分汲み取るように努めた。故に張謇は、最初から好み求めて民間独立の師範学校を設立しようとしたのではなかった。通州師範学校議の文の冒頭の一節は、「新政の気運が再開した光緒27年の春、すでに師範学校の設立を第一とする年次計画に基づいた各級学校の設立整備を請願したが、わずかに算術、測絵すなわち測量製図等の教師の養成しか考えてくれなかった。」と、不満足な答しか得ることができなかつたと述べている。さらに彼は、翌28年春再び申請をしたが、時期尚早として実現に至らなかつた。そこでやむなく自分で民間の師範学校の設立、「請于通州自立師範学校」という計画を出願したのであった。

「当時、湖南、湖北、直隸等の諸省にも漸く独立の師範学校設立の動きが生じていたし、他方では管学大臣・張百熙の奏請による欽定学堂章程に大学堂・高等学堂・中学堂に、独立の機関としてではないが、師範の附設が規定されたことなどもあって、師範教育推進の気運も高まったことによって、漸くにして民間私立の師範学校設立の認可がおりた」。ここから彼の教員養成教育に対する熱意と識見、努力とを知ることができる。張謇の「当時、湖南、湖北、直隸等の諸省は師範学校設立の動きが生じていた」という一節は、光緒28（1902）年、張之洞が南京に三江師範学堂設立を奏請したこと、直隸総督・袁世凱が「師範学堂暫行章程」の上奏をしたことなどを指している（注17）。

また、同じく通州師範学校議に見える「さりとはいえども（上奏を指す：筆者注）、教育に熱心な大臣がこれを言わなければならない。国民の知識向上のため、政府がこれを行わなければならない

い。われわれ普通の小民が、大胆に行うことではない。しかし、仕方なく同胞の国民のために教育を興し、師範を建てるのである。」という一文は、師範教育推進についての彼の考えを示すものである。すなわち、彼自身による私立師範学校の設立は、やむをえざるの末のことであって、元来は政府自体が熱意をもって乗り出すべきことであると、その見解を述べるわけでもあった。

通州師範学校は光緒33（1907）年4月27日に正式に開設された。「通州師範が小学校教育を興すため、最初に尋常科を設ける。」初めは小学校教員養成のための尋常師範学校として出発するが、やがて4年の後には高等師範学校の増設を予定していた。学生は「取挙貢生監為師範生」で、4年の本科、1年の講習科、2年の簡易科の3つのクラスになっている。学生の年齢、経済力と本人の志願によってそれぞれのクラスに入る。必修科目は国文・修身・教育・倫理・算術・物理・化学・歴史・地理・博物・図画・手工・体操などであるが、本科生は4年目から3つの選択科目もある。政治経済学、農業化学及び英文である。これは学生の将来の進路のため「多備進取之途」と設けた科目である（注18）。張謇は実業者として、やはり師範教育の実際に役立つ知識や行政能力獲得という実利を重視している。

彼は通州師範学校を創設して間もなく、再び日本教育視察を行った。日本政府から第5回国内勸業博覧会への招待を受けたのである。滞在期間は70日、この間彼は各地の各級教育機関を調査した。日本各地の市町村立小学、就中単級小学校や複式小学校などの小規模学校や変則の学校の調査と学校運営の方法を詳細に調査する一方、文部省編纂の小学校用各種教科書を収集した。こうした調査活動を通じて張謇は、極度の貧困に苦しむ当時の中国の社会経済状況に適合した学校教育の在り方を模索したのである。又、彼は、日本の工場や企業、銀行などをも精力的に視察した。これらの活動を通して張謇は、教育認識を深め、「国家存立の危機に直面した中国を救うには、教育の振興以外に方法はなく、そのためには実業を起こし、教育振興に必要な財政基盤を確立すべきである」（注19）と強く主張したのである。張謇の推進した通州地方の教育改革事業は以下のようなものであった。これらのうち、通州博物苑や女子師範学校、盲啞学校は中国教育史上の先駆的教育機関である。

1903年4月：通州師範学校を通州城東南に位置する千仏寺跡に開設。これに木造高俊以下5名の日本人教習を招聘。

1904年2月：自宅に幼稚園を開設。これに日本人保母・森田政子を招聘。

1904年5月：通州地方の教育行政機関や学務処を開設。初等教育の普及事業に着手。

1905年9月：日本帝国博物館をモデルとする通州博物苑を開設。通州女子師範学校を開設。両江総督宛「請設工科大学呈」を提出、工科大学の設置を建議。

1906年1月：芸徒学堂及び吳淞商船学堂を開設。

〃：通州師範学堂に農科と小学堂を附設。前者は後、通州農学校として独立。

1907年：江蘇按察使に盲啞学堂の設置を建議。

1909年：紡績学堂の設置を建議。

張謇は当時の知識人であり、実業者でもある。彼は実利を重視する立場から、通州においていろいろな実業学堂、学科をつくった。地方教育の発展に大きな役割を果たしたのである。張謇が創設した中国最初の私立師範学校・通州師範学校と、光緒23（1897）年に設立された南洋公学と比較す

れば、次のように言うことができる。

南洋公学は初め師範院、外院、中院、上院の4院から構成されていた。師範院はその中の一種である。外院は小学校、中院は中学校、そして上院は高等専門学校に該当した。あくまでも南洋公学は総合的な学校であるが、しかし通州師範学校はいわば民間設立の独立の師範学校として創設された。また、南洋公学設学のめざすところは、その中心が通州師範学校のように、教員の養成に置かれたわけではなかった。その学校の設学宗旨の示す限り、公学に学んで初めから終わりまで一貫教育の中で修業し、卒業してゆく学生は「もっぱら政治家たるの学を学ぶ」ことを目的とし、学校自体はフランスの「国政学院」に倣うことを本来の趣旨とした。決して師範教育の目的で設立されたものではなかった。しかし、結果として師範院の創立は中国近代師範教育の濫觴であったのである。通州師範学校は独立教員養成機関として、また民間設立の師範学校としては確かに中国の近代師範教育中において最初の独立教員養成学校である。

終わりに

光緒29（1904）年に制定された「奏定学堂章程」では、教師養成教育に対する基本的構造が示されるとともに、教師の養成が各級学堂に付随した附設の機関としてではなく、分離独立した機関として設立された学校で行われることを原則的に規定したことは、盛宣懐が創立南洋公学師範院、張謇の主張と通州師範学校の影響もあったのではなかろうか。

しかし、当時の師範教育の基本的な指導方針としては、「中体西用」論、つまり、「中学を体となし、西学を用となす」という教育の基盤となっている。

光緒29（1904）年に頒布された「学務綱要」には、「若し学堂にて経書を読まざれば、則ち「堯舜禹湯文武周公孔子之道、所謂三綱五常」は尽行廢絶し、中国は必ず立国する能わず。学、基本を失えば則ち学無く、政、基本を失えば則ち政無し。基本失われれば、則ち爱国愛類の心も亦た之れに随って改易せん。安んそ富強の望有らんや。」（注20）と、はっきりとした教育理念が明示されている。この点について陳青之は、以下の4点を指摘して批判した。(1)封建思想がきわめて濃厚である。(2)科学の遺毒が依然として保存されている。(3)民族意識（国家主義）が次第に顕著になっている。(4)君権を提唱して民権を抑制している。

この教育理念下の近代中国師範教育は、その教育内容に儒教の色彩が強い。また教育課程は「中学為体、西学為用」の考え方から、「忠君」の儒教主義モラル注入のための教科に、国家強盛に役立つと見られる近代的諸教科を付け加えることによって構成されていた。

注

- 1、台湾中央研究院編『大明実録』（巻78）1967年
- 2、張廷玉ら『明史』巻69〈選挙志一〉台湾商務 2010年
- 3、李友芝『中国近現代師範教育史資料』P.130～133 北京師範学院 1983年
- 4、「時務報」巻五「論学校一」

- 5、盧紹稷『中国現代教育一冊』P.96 商務印書館 1934年
- 6、『交通大学校史』(1896～1949年) P.21～27 上海教育出版社 1986年
- 7、董康・王君南『董康東遊日記－中国近現代日記叢刊』上海人民出版社 2018年
- 8、舒新城『中国近代教育史資料』「盛宣懷『東遊日記』」人民教育出版社 1961年
- 9、同注8 掲書
- 10、同注8 掲書
- 11、梁啓超『飲冰室文集』P.34 第一冊 北京出版社 1999年
- 12、『交通大学校史』(1896～1949年) 上海教育出版社 1986年
- 13、黄炎培『敬悼吾師蔡子民先生』重慶「大公報」1940.3.23
- 14、『交通大学校史』(1896～1949年) 上海教育出版社 1986年
- 15、舒新城『中国近代教育史資料』「張季子九録」第11冊
- 16、『中国近代教育文選』P.315 人民教育出版社 1983年
- 17、陳学恂『中国近代教育文選』P.328 人民教育出版社 1984年
- 18、丁致聘『中国近七十年教育記事』P.31～34 商務印書館發行 1939年
- 19、張謇『癸卯東遊日記』1903年
- 20、薛人仰『中国教育行政制度史略』P.84 台湾中華書局 1983年

(サイ シュクフン：アジア文化学科 教授)

